
化け猫は喧騒を招く

二等海士長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化け猫は喧騒を招く

【Nコード】

N2173M

【作者名】

二等海士長

【あらすじ】

高校2年生の“僕”の家族は両親と妹の瑠奈るな、そして飼い犬のテマリ。今、父さんは海外出張中で母さんは父さんに付いて行った。だから今や僕が家長。家長だからボランティア清掃もやるし拾った仔猫の世話だってやりますとも。でもある日、拾った仔猫が……。

この話は擬人化要素を含みます。苦手な方はスルーをお願いします。

その1：コンニチ八日常（前書き）

人物紹介

《夜鳥家》

【両親】

……子供をほつたらかしにして海外出張中の大人。仕事は出来るけれど、この時期に家を空けるのは親としてどうかと思う。

【僕】

……主人公。極々普通の高校2年生。名前は一応ついていて、『十^{じゅう}禄^{ろく}』となっている。名前の由来は獅子^{しし}4×4で16だから。

【妹】

……素直で可愛い、“僕”にとっては自慢の妹。名前は瑠奈^{るな}。頭も良いし料理も上手。でも、ブラコン。

【テマリ】

……夜鳥家の飼犬。雑種のメス。手毬みたいに小さくてコロコロしていて可愛いからテマリと名付けた。……でも、今は大きい。

その1：コンニチ八日常

春も終わり、まだ夏になりきってはいない時期の早朝。自宅の2階の自分の部屋。

まどろみの中、僕は生温かい感触に包まれて覚醒した。

(これは……耳を舐められている！？)

ようやく目覚め始めた頭は、肌に当たる荒い吐息と“舌”の感触で飽和している。妹の悪戯だろうかと思ひ、ゆっくりと目を開けると、そこには……。

「ハッハッハッハッ……」

美しい毛並のウチの飼い犬が、よしかかるようにして僕の耳を一心不乱に舐めていた。

「……テマリ、待て」

飼い犬の名前を呼びながら押しつけるようにして体を起こす。テマリは首を傾げながら、僕の様子を見ている。

僕は一度大きく伸びをして、テマリを撫でてやる。

「おはよう。今日も起こしてくれてありがとう」

「わんっ！」

尻尾を高速で振りながら、まるで言葉が解るかのように一吠えするテマリ。起こし方に難が有るけど、噛まれでもしない限りは良い目覚ましだと思つことにしよう。

「今日は木曜日か。さて、今日も1日頑張ろうかな」

僕が衣装ケースから適当に服を見繕い着替えていると、ドアがノックされた。

「お兄ちゃん、起きてる？」

妹だった。

妹も毎朝、僕を起こしに来てくれるのだ。……大抵はテマリの方

が早いし確実なんだけどね。

「起きてるよ」

「わん！」

何故かテマリも返事をした。

「じゃあ、入るね」

ガチャリと音をさせてドアが開き、妹が顔を覗かせる。

「おはよ、お兄ちゃん」

「おふあやう」

僕が欠伸混じりに挨拶すると、妹はクスクス笑う。

「ダメだよ、シャキツとしないと」

「眠い」

「朝ご飯は出来てるけど……」

妹はテマリをちらりと見た。ふむ。

「テマリを散歩させてから食べるよ」

「うん。じゃあ、待ってるね」

そう言って部屋から出ていく妹。その足音が階段を下って行った。

「さてと。僕達も行くかうか」

「ワウン」

僕はテマリを抱え上げた。実はこの馬鹿犬^{テマリ}、階段を上る事は出来ても下りる事が出来ないのだ。だから毎朝毎朝、僕が2階から1階へと抱き抱えて下ろしてやるのだ。

「わふん、キュウウン」

「暴れるなよ……」

階段を下りながら暴れないように声をかける。

(おとなしくなったよなあ……)

おとなしく腕の中に納まっているテマリと、記憶にある子犬の頃のテマリを比べてみる。最近でこそ大人しく抱えられるけれど、子犬の頃のテマリは暴れて何度も階段から落ちていた。

「懐かしいけど、もう巻き込むのは勘弁な」

「わう？」

今、この体格のテマリに暴れられたらと思うとゾツとする。早いところ階段を下りてしまおう。

階段を降りて玄関に向かい、靴を履く。この間にテマリは元気を取り戻している。

「わんっ！ わん！」

縮こまっていた先ほどの姿がウソのようだ。

僕はテマリの首輪にリードを付けて、散歩に繰り出した。

僕とテマリは30分くらい軽く走ったりしていた。

「わんっ！ わんっ！」

「人間が犬に勝てるはずもないよな」

実際、30分もすると僕は肩で息をしていたが、テマリはまだ余裕がある。流石に狼の末裔だけはある。痩せても枯れても狩猟者の血が流れているんだな。

町内一周、約7キロの距離を走って家の近くに帰って来た。

僕達の散歩コースには神社がある。家のすぐ近くのみあまり大きくもない、正式な名前も知らない神社。その境内を通り抜けるのがいつものコースだ。

ザアザアと木々のざわめきが聞こえる境内に、カラスが3、4羽たむろしている。朝も早いうちだからカラスの他には誰もいない……と、思ったら、居た。

境内の片隅。そこにある薄汚れたベンチにお茶のペットボトルを片手に座る少女。

「やあ。おはよう、キサナちゃん」

「ワウッ！」

「……おはよう」

コチラに全く視線を向けず、適当に挨拶を交したこの子の名前はキサナ。

金髪碧眼の少女で、どう見ても血が繋がっていない男の人と一緒に

に暮らしている。その男の人というのが、この子がじつと見つめている相手だ。

境内の一角。どこかの神様を祭った社に向かって熱心に拝む青年。足元には何故か講談社の週間誌モーニング。いったい何をそんなに熱心に拝んでいるのだろつかと思つて眺めていると、あちらも顔を上げた。

「おはようございます」

ちよつと目付きの悪いオニサンと目が合い、自然と挨拶が出来てしまう。怖いからじゃないヨ、知り合いだからだよ。

「やあ、おはよう。君たちも散歩かい？」

この人は二階堂さん。神社近くの足湯喫茶の店員さんだ。

「そうです。テマリの散歩に……」

「わんっ」

一吠えして二階堂さんに走りよるテマリ。テマリは僕に対して程ではないけれど、この人にも懐いている。多分、僕以外の家族以上になつているんじゃないかな。

テマリは二階堂さんに撫でられて弛みきつてしまつている。本当に狼の血を引いているのか疑問に思える程だ。

「二階堂さんも散歩ですか？」

「それもあるね」

何をしていたのか尋ね返すと、なにやら含みのある言い方をされてしまう。

「ああ。お参りですか」

「それもあるけど、今日の夕方の下見さ」

僕は今日の夕方と言われて思い出した。確か今日は、町内会のボランティア清掃の日だ。ウチの班は境内の掃除を担当していたっけ。

「忘れてました」

「忘れちゃダメだよ。君達若者が頼りなんだから」

二階堂さんもまだ若いと思つたけど

「やっぱり10代の若さと20代の若さって違うんだよね」

と、言われてしまい、沈黙するしかなかった。僕にはまだ分からないけれど、そんなモノなんだろう。歳をとれば分かるのだろうか。

「バウツ！ わうっ！」

しばらく談笑していると、テマリが吠えてジャージの左袖にかぶりついてきた。

「え？ おっと」

何かと思って左腕を見た時に時計が目に入り気付いた。既にけっこうな時間が経っている。

「すいません、二階堂さん。朝の支度がありますので失礼します」

「おや、もうそんな時間かね」

あまり余裕が無いので足早にその場を立ち去る。チラリと振り返って見ると、二階堂さんはキサナちゃんに何やら怒られているようだった。

家に帰ってシャワーを浴び終わると、既に妹が朝御飯の用意をしてくれていた。何もやらないというのも嫌なので、テマリのエサは僕が用意する事にしよう。

レタスを水洗いして、葉を2、3枚剥いでボウル皿の中に入れ、その上からシーチキンを乗せてやる。全く犬のエサらしくないが、これがテマリの好物なのだ。

「テマリー、出来たぞー」

「わん！」

テマリがムシャムシャと食べている間に、僕も食事を済ませてしまおう。ついでに、妹にも夕方のボランティア清掃について話しておかないとな。

「……と、言う話をしてね。だから今日は放課後に予定を入れないように」

「ええーッ！ 今日の夕方なの？」

妹はなにやら困り顔で僕を見上げてくる。

うむ、愛い奴じゃ。思わず撫でてやりたくなるが、テーブルを挟んで向かい合わせに座っているから手が届かない。いや、本当に残念だ。

「何か予定が？」

心の内の葛藤を顔には表さず、僕は訊く。

「うん。あのね、明日からの合宿に必要な物を買に行こうって、みんなと約束してるの」

「ああ、そういえばそんな話をしていた気もする」

確か、金曜の夜から土日を利用しての合宿に行くと言っていたわけ。

「じゃあ、僕とテマリで行くからさ。瑠奈はみんなと買い物に行つて来るといいよ」

正直に言つてかなりの戦力ダウンだけど約束があるなら仕方がない。

「え……、でも」

「約束してるんだろ？ だったらそつちを優先しなよ」

「……良いの？」

僕を上目使いに見ながら小首を傾げる妹に少しドギマギしつつ、任せると言つように胸を叩いてみせる。

「いいつてば。気にせず任せとけ。それより、朝練に遅れるぞ」

妹の部活は朝から練習があるので家を早く出なければならぬ。

まだ申し訳なさそうにしている妹に、この話は終わりだと告げて早く登校するように促す。

「うん。ごめんね、この埋め合わせは絶対するからね」

結局、妹は申し訳なさそうにしたままだった。兄妹でそこまで気を遣わなくてもいいのに。

食器等をある程度片付けると、僕も登校する。まあ、学校での僕は目立たない存在だし、特筆すべき事は無いな。

「おーい、夜鳥！ ブトウームの2巻貸してくれい」

ホームルームの終わらないうちに漫画を借りに来る特筆すべき馬鹿はいるけどね……。

あつと言う間に放課後。僕は一端家に帰ってみたけど、妹は帰っていなかった。どうやら、学校からの帰りに直接買い物に行くようだ。

「じゃあ、行こうか」

「ワン！」

僕は、テマリのリードを引いて地区の集会所へと向かった。

その1：コンニチ八日常（後書き）

まだプロローグです。マッタリ更新予定でしかも、しばらくは化け猫は出ませんけれど、気長に御待ち下さい。

その2：闇に鳥、手の中に仔猫（前書き）

人物紹介

【二階堂さん】

……近所の喫茶店『足湯喫茶・花夢園』カムオンの店員。悪戯好きな大人で、ちよつと皮肉屋。

【キサナちゃん】

……二階堂さんの身内？ いや、全然他人だと思われる少女。

その2：闇に鳥、手の中に仔猫

さて、区長のおじいさんの号令の下、僕達は清掃活動を開始した。総勢25名（+犬1匹）とは言っても参加者はお年寄りと子供ばかりで、僕と二階堂さん以外は年金受給者か小学生という構成だ（犬を除く）。働き盛りの皆様は未だ帰宅しておられないので仕方ないかな。

子供や老人が頑張って掃除をしたのだから、大人達も少しは美化意識を持ってくれたらいいんだけど。

「では、我が3班の清掃区分に行こうか」

「そうですね」

二階堂さんと会報用の写真を撮っていた写真屋の三田村さんに合流して神社に向かう。

「夜鳥くん、瑠奈ちゃんは今来ないの？」

「ええ。部活で遅くなるらしくて……」

「そっか。大変だね」

三田村さんはいい人だけど、事ある毎に写真を撮り過ぎて少しウザイ。

「それじゃあ、今日は3人でお掃除か」

二階堂さんは少し気落ちしたように言う。

「大丈夫ですよ、テマリがいますから」

「テマリくんが参加するなら、キサナも連れて来るべきだったかな」

もしキサナちゃんも参加していたら……？ 犬テマリと戯れる少女キサナちゃんの姿

を三田村さんが狂った様に撮りまくる様が目に浮かぶ。正直言つて警察を呼べるレベルだ。

「うっむむ」

僕と同じ事を想像したのか、二階堂さんは顔をしかめていた。

「よっ……と。だいたい終わったかな」

「けっこう時間がかかりましたね」

日が沈みきる寸前、清掃はなんとか区切りがついた。本当ならもうちょっと早く終了する筈だったんだけど。

「三田村さんにも困ったもんだ」

「そうっすね」

途中で三田村さんが会報用の写真を撮影するために他の場所に行ってしまった。予想外に時間が掛ったのはそのせいだ。退屈なのか、テマリなんか境内の隅で寝てるもんな。

「ま、愚痴つても性無いし、ゴミをまとめて行こうか」

「そうですね。……ん？」

空き缶を袋にまとめていた僕の耳に、何かの叫ぶ声が聴こえた。

「わん！」

テマリがすつくと立ち上がり、本殿の裏手へと駆け出す。

「ちよつと行ってきます！」

「え……、おい」

僕はテマリの後を追う様にして走り出した。

本殿の裏手には雑木林があり、いくつかの石灯籠が苔に埋もれて立っている。その中に今はケモノが2匹。

まあ、片方はウチのテマリだけど、もう一方はなんだろう？ カラスか？ 最近のカラスは大きいな。

雑木林の中を飛び回るカラスと、それを追い回すテマリ。テマリはカラスが木や灯籠にとまる度に吠えかかる。何をそんなにつかつかるのかと思い良く見ると、カラスは足にナニやら捕まえている。白っぽいソレはどうやら仔猫のようだ。

テマリは仔猫を助けようとしている。僕はそう確信した。

「弱肉強食、か。自然の摂理だな」

「え？」

僕に追い付いた二階堂さんがウンザリした様子で言った。

「無理だ。空を飛ぶ相手に勝てるわけがない」

でも、テマリは諦めていない。そして僕も……。

「テマリは無理でも、僕がやります」

「ふーん？」

僕は二階堂さんを尻目にザシザシとカラスに向かって歩く。カラスの嘴が仔猫をつつく寸前に、僕は声をあげた。

「待て！ その猫を「アア!?!」……僕に譲ってくれない？」

後ろで二階堂さんが『なんじゃソリヤ』と、ズッコケたのがわかった。だってこのカラス、なんか怖いんだもん。

「……えっと、バーガー2つでどう？」

「……カー」

カラスは一声鳴くと飛んで行った。

「馬鹿にしたような鳴き方だったなあ」

「……言わないで下さい」

テマリが後に残された仔猫を優しくくわえて僕の前にやって来た。仔猫は虫の息でも生きている。

「それにしても、助けてしまったね。この後はどうするんだい？」

「どうするって……」

二階堂さんは続ける。

「この猫は虫の息だ。動物病院にも連れていかないとダメだし、飼うならお金もかかるよ」

「それは……どうにかします」

以前バイトをしていたお金もあるし、毎月の小遣いだってあるんだ。どうにかなる。

僕は仔猫を抱き上げ、家で飼う事を決意した。

「そうかい。なら、獣医にみせるお金は私が出そう」
「え」

「以外な申し出だった。」

「いいんですか？」

「いいに決まっています。大人の懐は子供に頼られる為にあるんだ。」

「それに」

「それに？」

「二階堂さんは照れたように笑って言った。」

「君が助けに入らなかつたら、私が助けに入っていたからね」

「……まあ、あんな取引きを持ち掛けたりはしなかつただろうけど。」

「と、二階堂さんは笑って続けた。」

戻ってきた三田村さんに片付けを任せて僕達は動物病院に向かった。

仔猫は衰弱していたが命に別状は無いとのことで、獣医の先生と今後の予防接種なんかの予定を話し合つて会計をする。ここはテマリを連れて何度も通つた病院で、一応はツケがきくのだけど、今回は二階堂さんの分厚い懐が頼りになった。

「うわ。真つ暗だ」

「二階堂さんが会計を済ませる間に、僕は仔猫を抱きかかえテマリを連れて外に出る。外は完全に日が暮れ、夜の帳がおりていた。」

「そんな夜の世界。街灯のくつきりした灯りの外側、月のボンヤリした光の中に影が浮かんだのに気が付いた。」

「鳥……鳥？」

「こんな夜にかい？」

「僕に続いて外に出た二階堂さんは何も見なかつたみたいだけど……」

「ウウウウ……」

「……」

「テマリは何かを威嚇するように唸り声を発し、仔猫は僕の手の中」

で更に丸まった。

「うわっ」

羽音がしたかと思うと、二階堂さんが引つ繰り返った。

「だ、大丈夫ですか」

「医者が診て大丈夫だと言えばね……」

「一体何が」

「カー」

一声で十分だった。

夜の闇の中に闇より黒い影が空を舞っていた。

「ただいまー」

「わっ」

僕達は這う這うの体で家に帰り着いた。

あの後、泡を食って近くのコンビニに駆け込み、ハンバーガーを2つ買った。

道にハンバーガーを置くと、カラスはソレをすぐさまかつ拐って行き、僕達は胸を撫で下ろして帰途に着いたのだった。

「おかえりなさい」

妹がりビングから顔をのぞかせた。なんだかホツとする。

「ご飯出来てるよ。……ずいぶん疲れてるみたいだけど、どうかしたの？」

「いやあ、それがさ」

僕は、抱いていた仔猫をゆっくりと床に下ろした。

「わ、わ！ 猫だ。可愛い。このコ、どうしたの？」

「今日からウチで飼う事にした」

妹はすっかり仔猫に夢中になってしまった。

「はあ。可愛いよー。モフモフしてるよー」

テマリが小さかった頃に使っていたケージに仔猫を入れる事になつて、妹はケージの前にしゃがみ込んで離れようとしな

「病気なんかは持ってないみたいだけど、弱ってるしあまり触るなよ」

「うん。大丈夫だよ」 仔猫をジッと見つめる妹と、その横に座るテマリ。僕はミルクを作って仔猫に飲ませる。

ネットで軽く仔猫の育て方を調べ、動物病院で貰った仔猫用補乳瓶と仔猫用ミルクを温める。

「ミルクは温かめで寝床は暖かく暑すぎず……か」
補乳瓶を口に持って行ってやると

……ミイ、……ミイ。

初めて鳴いた。

翌日、僕は学校を欠席して仔猫の面倒を見る事にした。妹は学校にはちゃんと行くべきだと言ったけど、僕は猫の方を優先した。

その2：闇に鳥、手の中に仔猫（後書き）

まだまだ仔猫は普通の猫のままです。化けるのは大分先になります。

その3：サボタージユは茨の道

……ミイ、ミイ。

朝。猫の鳴き声で目が覚める。テマリ以外に起こされる朝と
いうのは新鮮に感じられる。

「ワンっ！」

「おはよう、テマリ」

ドアの横には所在無さげなテマリの姿があり、どうやら部屋に入
った段階で仔猫が鳴いてしまったのだらう。戸惑っているのが分か
る。

目標を見失ってしまったテマリをヨソに、手早く着替えてベッド
を後にする。

ケージの中、寝床から這い出た仔猫を抱き上げ、僕は1階へと降
りる。階段を降りられないテマリは2階でキュウキュウ言っている
が、しばらくは構ってやれない。

「テマリ、スタンバイ」

僕はテマリを臥せさせると、妹がいるであろうキッチンへ向かっ
た。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう」

「朝御飯とその仔のミルク、出来てるよ」

「ん。ありがとう」

僕はタオルを敷いた籠の中に猫を降ろし、今度はテマリを下ろし
に戻る。

「クキュウ。キュウウン」

テマリは2階から降りられず、階段の手前でウロウロしていた。

「ほら、ご主人様が迎えに来てやったぞ」

大仰に手を広げると、テマリは尻尾を振りながら飛びついてきた。尻尾を振りながらでも

「ウウウ」

と、唸りながら肩をガジガジ噛んでくる。仔猫を先に下ろしたのが余程不満だったんだろうか。

テマリを降ろしてリビングに戻ると、妹が仔猫にミルクを飲ませていた。

「あ。お兄ちゃん、このコ、すっごい可愛いね」

目を細めながらミルクを与える姿は母親っぽく見え、我が妹ながら可愛い。

フム。この場合はマザコンと言つべきかシスコンと言つべきか迷つちゃうな。……なんて考えてみるけど、深遠へと旅立つ前に思考を中断する。

テマリにエサを与えつつ

「もう一度その猫を病院に連れて行くから、今日は学校を休むよ」

と、妹に言っておく。先生には適当に言っておいてくれ、という意味で言っただけ

「駄目だよ、お兄ちゃん。授業はきちんと受けないと」

と、妹様はのたもつた。至極真つ当な意見だ。更には『私がこのコを動物病院に連れて行くから、お兄ちゃんは学校に行つて』とまで言い始める。僕と妹の成績を見ても、妹の意見が正しいのは一目瞭然。

「だが断る」

「え？」

キョトンとする妹。

うん、会話の主導権イニシアチブを握るにはやはり、埒外の一言に限るね。

「瑠奈、『君は正しい。だが、正しくなくていい時もある』」

「……なにそれ」

「何が言いたいのかと言うと、部活で合宿に行こうってヤツが、学校をサボったら体面悪いだろって事」

「う、そうだけど」

シユン、となる妹。最初から選択肢など無かったのだ。

「なに、心配しなくていいって。受診が早く終われば僕は午後からでも学校に行く。だから仔猫の事は任せて先に行けばいいよ」

嘘である。本当はサボる気満々だ。……でも、ウチの妹はそんな見え透いた嘘すら信じてしまう。

「わかったよ。それじゃ、猫の事はお兄ちゃんに任せるけど、学校にもちゃんと来てね」

「ああ（多分、行かない）」

パンと一緒に本音を飲み込む。隠し味は妹への罪悪感で、後味は後ろめたさ。

家を出る妹を手を振って見送る。放課後に家に帰らず直接合宿先に行くらしく、荷物は昨日の内に学校に集積してあるので持ち物はいつもの登校時と変わらない。

ただ、一人で登校する姿は寂しそうに見えた。

「隣に僕が居ないからってのは自惚れすぎかな」

「ワウ？」

首を傾げるテマリの頭を一撫でして家に入る。

テマリは

「早く散歩に行こう」

と、言うかのような様に玄関で跳び跳ねる。でも、僕は暫くゆっくりしてから動物病院に行くつもりだ。

「9時過ぎるくらいまでは出ないよ」

「クキユウン」

僕の意図が伝わったのか、テマリはつまらなさそうに鳴いて寝転んだ。

お天道様も高く昇った頃、昼前に帰ればいいだろうと思いのんびりと出発した。

動物病院と僕の家の間にはこの町の商店街があり、その真ん中辺りには足湯喫茶“花夢園”がある。

前を通りかかると、二階堂さんが店の壁に何か吊るしている所だった。

「てるてる坊主ですか？」

「ん？ 夜鳥君か」

後ろから話しかけると、二階堂さんは手を止めて額の汗を拭いながら振り返った。

「てるてる坊主に見えるかね？」

二階堂さんが吊るしていたのは、金魚の形をした飾りだった。鮮やかな赤や黄色の金魚が風に揺られてクルクル回る。

「梅雨にてるてる坊主なんて吊るしていたら、私の方が吊るされてしまつよ」

「そう言えば、農家のご隠居が主な客層でしたね」

漁業と農業が主産業なこの地域では、カラ梅雨や冷夏は災いにはほかならない。梅雨にあつては雨降りを『良い天気』という程だ。

「客層ね。夕方は学生なんかも多いが、午前中は御隠居が多いか。しかし……」

二階堂さんはジロリと視線を向けた。

「そんな楽隠居くらいしかない時間帯に、どうして学生である君が犬猫を連れてウロついているんだい？」

「ええと、その」

厄介な事になった。この人もかなり説教臭い人なんだった。

「まさかサボってるのかい。いいかい、高校は義務教育じゃないんだ。君の親御さんは年間……」

変なスイッチが入ったのか、くどくどと説教タイムが始まる。誰かに助けて欲しい。

「君は自分の学生という身分をだね……」

「おうい、バイトよーい」

「あ、マスター」

助けは意外に早くやって来た。

花夢園のマスターである常願寺川じょうがんじがわさんが、店の入り口に立ってこちらを見ていた。

「年下の者に説教するのも良いけどよ、仕事してくれ」

「……は」

先ほどの飾り付けの続きをしようと脚立に手をかける二階堂さんだが、マスターから更に声がかかる。

「いや、飾り付けはもういいからよ。高田の爺さんが今日はまだ来ねえんだ。何かあったのかもしれないし、見てきてくれや」

「わかりました」

マスターの命を受け、二階堂さんは颯爽と駆け出した。自転車で。

「悪いな。ウチの店員が時間をとらせて」

残された僕にマスターが声をかける。

「いえ、僕は別に……。時間は余裕たっぷりですし」

「二階堂バイトも悪いヤツじゃないのさ。良く働いてくれちやいる。ただ、もう少し愛想が良けりゃあな……」

この後、僕はマスターの世間話に20分も付き合う事になる。その間に戻って来た二階堂さんが『まだいたのか』という顔をして店内に入っていた。

腕に抱えた仔猫がミイミイと鳴き、テマリが欠伸を連発し始めた頃、僕はようやく解放された。動物病院まで500メートルの地点で力尽きてしまう所だった。

動物病院の中はクーラーが効いていて快適だ。快適過ぎて眠気を誘う空間で、僕は院長の山岩先生から猫の状態の説明を受けていた。「妙な病気の兆候は無^ねっし。生後1ヶ月程のメスだよ」

古い事務用のイスに腰かけた山岩先生がカルテを読み、僕がたまに質問をする。

「歯も生え始めますし、離乳食を与えるべきですかね？」

「だー。離乳食を日に1回やってみて、来週頭からは日に2回つてえ風に頻度を上げえや」

山岩先生が検査台の上の仔猫を見やり、体重がかかったイスがギシギシ鳴った。

「カラスに襲われつとーども、外傷は有らんとよ。毛波も良か」

「そんなに良か毛波みですか」

先生の口調がうつつてしまった。コホン。と、咳払いをする。

山岩先生は特に気にもせず続けている。

「ノミダニもいやーし、毛波は完璧。良えしのお嬢やないかな」

「顔立ちも良いわ。将来は美人に育つやろつし、大事に育てんしゃい」

先生はそう仰った。

後から領収書を見たけど、リップサービスの料金は取られていなかった。

「不快指数高い……」

外に出てまず感じたのが空気の質量だった。午後になり気温は急上昇していて、空調の偉大さを思い知らされる。

外に繋いでおいたテマリは、尻尾をゆらゆらと振りながらどこか恨めしげな目を向けてきた。

「クウン」

「待たせたのは悪かったよ。そんな顔しないでくれ」

いつもなら千切れんばかりに尻尾を振るんだけど、今日のテマリは少しおかしい。帰ろうとリードを引いても足取りが重い。

でも、時たまやけに鋭い目付きで僕を……いや、僕が腕に抱える仔猫を見つめていた。

なんだか重たい空気の中をノタノタ歩いていると、ポケットの中のケータイが鳴った。

ケータイの画面を確認すると、『着信：馬鹿』の文字。

「馬鹿からか」

時間を確認すると12時30分頃。丁度、学校は昼休みだ。僕は深い考え無しに通話ボタンを押した。

「もしも……」

『夜鳥っ！ テメエ、何で学校に来ない！？』

耳をつんざく大音声が響いた。ケータイを耳から離し、電源を切る寸前で思い止まる。一応、友人からの電話だ。いきなり切ると後々面倒な事になりそうだし、ここは話してみよう。

「なんだよ、馬鹿」

『なんだよってオマエ！ アタシはオマエが学校に来ないから心配して電話かけてんだよ！』

……言っていないかったけれど、馬鹿は女の子で、フルネームだと馬鹿桜子（まじか「さくらこ」）だ。見た目は非常に美しく、均整のとれた体に、ちょっと垂れ目がちな整った顔立ちをしていて、腰まである黒髪をなびかせる姿はまさに大和撫子。

「……でも、性格と名前がな」

『何か言ったか？』

「いえ、何も」

馬鹿家は1000年続く家柄だと言うけれど、良く千年も我慢できたなと思うほど珍妙な苗字だ。馬鹿桜子の事だけを考えても性格はキツイし、一人称こそ“アタシ”だけど喋り方はヤンキーだし。見た目の良さが残念さに拍車をかける。

まあ、そのギャップが一部で人気らしいけど。どれ位人気がある

のか、と言つと……。僕の学校には『馬鹿受け』 まじかうけ

という言葉があり、意味は『一部の好事家・数奇者に受けが良い事』と、されている。そんな言葉が造られてしまつぐらい、一部には人気なのだ。……それはともかく。

『聞いてんのか？』

「ちゃんと聞いてるよ」

片手で電話を持ち直し、更に一方の手でテマリのリードと仔猫を抱える。もう待ちくたびれたのか、歩き始めたテマリに片手を塞がれた僕は成す術も無く、引きずられるようにしてその行動に付き合う。

仕方ない。なんだかご機嫌斜めなテマリに付き合おうか。

『おい、本当に聞いてるのか？』

「聞いてるよ」

何度目かの生返事。怒られるのは苦手だ。

『いいか！ 高校は義務教育じゃないんだぞ、オマエの両親がいくらの金を払っていると思ってるんだ！』

うわ、またこの話か。ひよつとしたら馬鹿は二階堂さんとグルなじじゃないかと思う。と、言うか、学校をサボって楽をするつもりが、周りがウルサイせいか気が滅入る。

「もう勘弁してよ。理由があるんだから」

『理由については了解してる。だがサボりはダメだ』

馬鹿の頑固さは見上げたものだと思う。僕は、暑い中を歩きながら延々と説教された。

「もう分かったよ。反省してるってば」

『ふーん。そうか、反省してるか』

うんざりして泣きをいれた。電話の向こうには僕を見下す様な薄笑いの気配がする。

『……ふ。これに懲りたら、もうサボったりするなよ。明日はキチンと学校に来い』

「いや、明日は土曜で学校休みだよ」

「……」

暫しの沈黙。そして……。

「あ」

唐突に通話が切れた。

「なんなんだ、いつたい」

一方的すぎる展開に、僕は思わずため息をついてしまう。用済みの携帯電話をポケットにしまった。

周りを見渡すと、いつの間にか畑の真ん中に延びる農道を歩いて
いた。

「テマリ、どこまで行くんだよ」

「ワフ」

朝の散歩に行かなかったのを根に持ってたか、僕が引つ張ってもテマリは先へ先へ進もうとする。仕方がないから、僕はテマリの好きに歩かせる事にした。

辺りはたまに耕運機をかけている人がいるくらいで平和なものだった。その耕運機の後をカラスがチョコチョコついてまわる。土中から掘り起こされた虫を狙っているんだろう。この時期の風物詩だな、などと思いつつ、僕はそのカラスの群れに一際大きい影がある事に気づかないで通り過ぎた。

「花夢園でお昼にしようかな」

昼御飯をどうするか考えている僕を追尾するようにカラスが一羽、飛び立った。

その3：サボタージユは茨の道（後書き）

農家のおじさんの目撃情報

「どでかいカラスがおつてや、オラの後ろについて来てたんだども、通りがかった男の子を追っかけて飛んでいったんだがや。いやー、でかいカラスでよお」

耕運機をかけてる間中、カラスについて回られるのも、プレッシャーを感じるみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173m/>

化け猫は喧騒を招く

2010年10月8日11時14分発行